

## 特別展「ビブリア古書堂の事件手帖」を開催して

小田島 一 弘

鎌倉文学館では、二〇一六年十月一日から十二月十一日まで、三上延氏の人気ミステリシリーズ「ビブリア古書堂の事件手帖」の特別展を開催した。

「ビブリア古書堂の事件手帖」（以下「ビブリア」）は、二〇〇二年に『ダーク・バイオレッツ』でデビューした三上氏が、二〇一一年から取り組んでいるミステリシリーズ。北鎌倉にある古書店「ビブリア古書堂」の若く聡明な店主篠川葉子が、内定先が倒産し求職中のアルバイト店員の五浦大輔と実在の古書にまつわる謎をといっていく作品。古書が添え物ではなく、その作者の生き方や作品の内容が、謎や登場人物の想いと結びつきぐいぐいと物語を牽引し、それに親子の確執や葉子と大輔の恋が併走する。年代と性別を超え、多くの読者を獲得し、発行部数はシリーズ

累計で六〇〇万部を突破している。

鎌倉市内の高校出身の三上氏が鎌倉を舞台に書いた作品で、一卷に「長谷の文学館」として当館が登場する縁もあり開催させていただくこととなった。文学館は、来館された方が展示から文学に興味を持ち、本をひもとくことを喜びとする博物館。「ビブリア」で紹介される古書はどれも三上氏の想いが込められ、読むとその古書を読みたくなるパワーを秘めている。作中の古書が復刊されたり、関連作品が売り上げを伸ばすなどの現象もおこしてきた。その作品を実資料で立体化することは、普段文学館になじみの方を文学館へいざない、かつ、観光で文学館を訪れた方が「ビブリア」をとおり文学へアクセスしてくれるのでは、という期待もあった。



展示は、既刊の一卷から六巻と二〇一七年二月に刊行予定の七巻をそれぞれ章として紹介することにした。ただ、当館は、観光地にあり歴史的な建物を活用した文学館であるため、ホワイトキューブの博物館と違い、展覧会以外の目的で来館する方も多い。そのため、初めて作品に触れる

方も作品に興味をもってもらえるよう序章を置くことにした。序章は、一読で「ビブリア」の新しさと面白さがわかる作家の紀田順一郎氏の書き下ろしエッセイから始めた。次に三上氏の執筆関連資料と二〇〇冊を超える参考文献の一部を展示。さらに主な登場人物の紹介とゆかりの地図をパネルで展示し導入とした。

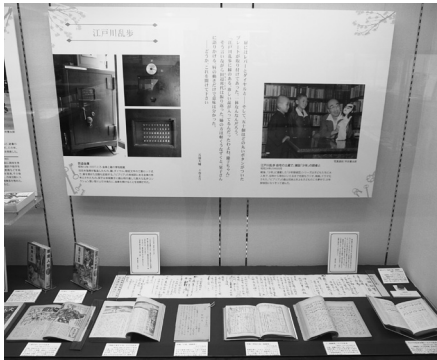
既刊の一卷から六巻を紹介する第一章から六章は、それぞれの巻でストーリーの鍵となる本を可能な限りオリジナ

ルで展示し、それに関連する原稿や書簡をあわせて展示した。中でも物語全体の鍵となる太宰治『晩年』は、その献辞が重要なため前後期で四冊を展示した。また、寺山修司が歌人の塚本邦雄にメッセージを書き添え贈った『われに五月を』など文学的にも、古書としても価値ある資料を展示した。最後の第七章（七巻）は、三上氏に七巻の予告的なエッセイをいただき、七巻で鍵となるシェイクスピアに関する本を紹介した。

ここで、江戸川乱歩をテーマにした四巻を紹介した第四章の展示資料について少し触れることにしたい。四巻は、亡くなった乱歩マニアのコレクションが核となるシリーズ初の長編。乱歩自身のエピソードと作品が鍵となり物語が展開する。エピソードは三人書房時代と「押絵と旅する男」の第一稿にまつわるもの。作品は「二銭銅貨」「少年探偵団シリーズ」など。特に、「二銭銅貨」の点字のトリックは、四巻の重要な鍵であるため、それにまつわる草稿、創作メモなどの資料を充実させた。さらに、三上氏が取材した旧日本陸軍の防盜金庫を写真で紹介した。立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センターと乱歩の孫にあたる平井憲太郎氏のご協力で充実した展示となり、熱心にご覧になる方が多かった。戦後すぐに少年探偵団シリーズに夢中になっ

た年代の方が多かったが、乱歩の名を借りたキャラクターが登場するマンガで、アニメにもなった「文豪ストレイドックス」の人気からか、乱歩の資料に見入る若い女性も多かった。

今回、展示する上で難しかったことは、初めての方にストーリーを紹介しつつ、いわゆるネタバレしないよう章やキャプションの文章を作成しなければいけなかったこと。古書を紐帯とする人と人のミステリなので、それぞれの想いが重要で、ネタバレを気にするあまり想いをそぎ落とし



ては元も子もない。そのため、作品からの引用を小さなパネルで展示しそれを補完した。

関連イベントは、講座と対談を開催。十一月十日に開催した講座「江戸川乱歩」は、大衆文化研究センター学術調査員の落合教幸氏にご登壇いただき、センターの資料映像を交え、コレクションの概要と乱歩の人生の概略をお話しいただいた。「ビブリア」の四巻で、乱歩の少年探偵団シリーズの版元が、戦後、光文社からポプラ社に変わったことが鍵となり一つの事実をあぶり出す場面がある。今回、

落合氏からポプラ社が副読本なども手がけ学校に強かったため、小学校の図書館や学級文庫に少年探偵団シリーズが置かれ多くの子どもたちに読まれ、ファン層が拡大したこと、それが今の乱歩人気につながるのでは、という興味深い話も聞かれた。

十一月十九日の「書店ミステリ対談」は、古書店の三上延氏、新刊書店の大崎梢氏、かつて書店に勤務していた作家二人による対談。それぞれの体験による興味深い話が続く中、「ビブリア」の四巻で、葉子が依頼者に古書についての知識を試される場面に話が及んだ。そこに登場するのが乱歩の『孤島の鬼』。執筆の途中で『孤島の鬼』と装幀や厚さが同じ

乱歩の本がもう一冊あることがわかり苦心したと、実在する本をベースにする作品ならではのエピソードも聞かれた。

展覧会は、六十九日の会期で二万七千六十九人が来場。秋の特別展の来館記録を千五百人近く更新した。先述のとおり観光施設でもあるため、全員が展覧会を目指してきてはいないが、アンケートで「展覧会」を来館目的とした方が四四％で通常より多く、それが来館記録の更新という数字に表れたと思う。満足度も「とてもよい」が四二％、「よい」が三九％で、あわせて八一％が好評価だった。その内、展覧会が目的で来館した方は「とてもよい」が五七％、「よい」が三三％で、あわせて九〇％と好評価だった。過去五年間で「とてもよい」が「よい」を上回ったのは初めてだった。また、フリーアンサーで一番多い感想は、「作品にでてる本の実物がみられてよかった」で、展覧会をきっかけに初めて訪れたとの声も多くいただいた。ファンの方にもそうではない方にも好評で、先述の期待とおりの開催結果だったと感じた。

三上氏が綿密に調査し紡いだミステリを実資料でたどるという展覧会は、本展に貴重な資料を貸してくださった各機関そして個人の方々の地道な整理なしには実現しなかつ

た。立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センターはじめ、ご協力くださった各位に深謝いたします。

（鎌倉文学館副館長）